

アナログ再構成後の活用(30)
ーベートーベンを聴く(29)ー

1. 始めに

前報(29)に引き続き、ベートーベンのアナログ盤を試聴していきます。

2. アナログシステムについての改善の試聴方法

試聴は LINN LP-12 のシステムでアクセサリ関係も最新情報に基づいて実施し、要時 Garrad 401 のシステムも加えます。これまでの状況は、オーディオ資料室の再生経路と変更点 4 に要約しています。なお、バイワイアリングのスピーカーケーブルにケーブルチューナーが装着されています。さらに、追加の変更点については、オーディオ資料室の再生経路と変更点 5 とオーディオ資料室の再生経路と変更点 6 に要約しています。

再生経路は、LP-12 のアームの調整も終わりましたので、次のとおりです。

LP-12→AACU-1000→Stage1030→Brooklyn DAC+→AACU-1000→

P&G フェーダー→300B シングルアンプ

今回は引き続きベートーベンのピアノソナタを聴いていきます。

今回取り上げる盤は、次のアナログ盤です。

ドイツグラモフォン MG2367

ピアノソナタ 31 番変イ長調作品 110

ピアノソナタ 32 番ハ短調作品 111

ウイルヘルム・ケンプ

3. アナログシステムについての改善結果の試聴結果

前報(29)に続いてのベートーベンの後期のピアノソナタです。後期のピアノソナタは地味なところもありますが、ケンプの鋭角的な演奏においても詩的であったり、思索的であったりと、表情が刻々と変わります。

このような思索的な演奏は、バックハウスのがっちりとした構成の演奏、ハイドシェックの感性に任せた演奏と対比させて聴くと興味深いものです。

4. まとめ

アナログシステムの再構成の結果、前報(29)に引き続き、ケンプによる思索的なベートーベンの後期のピアノソナタが味わえるようになりました。

以上